

建築と風俗

井上 章一

世に「エロ本」と言われる書物がある。読者を性的にあおりたてようとする。そんな本のことを、われわれは「エロ本」と、よびならわしている。

本の中身を細分化して、「エロ小説」と言ったりすることも、ないではない。「エロ写真」とよばれる写真集も、けっこう刊行されている。

本からははなれるが、「エロ映画」と称される映画も存在する。しかし、ほかの表現ジャンルに、「エロ」という言葉でいるどられるものはない。われわれが、「エロ」を頭にしばしばかぶせるのは、本と映画だけである。

もちろん、美術にも、煽情をもつぱらとする作品はある。ただそれらを、「エロ美術」とよぶことは、あまりない。「エロ絵画」、「エロ彫刻」、「エロ版画」といった言いまわしは、耳になじまないだろう。

とはいえ、「好色美術」という表現はありうる。「エロティック・アート」という言い方も、けっこう流布している。われわれが、「エロ美術」と口にしないのも、もっぱら語感のせいかもしれない。絵画や彫刻も、じゅうぶん鑑賞者を、その気にさせる。好色気分を喚起させる力をもつ表現手段である。

では、建築はどうだろう。

「エロ建築」という言葉はない。まあ、助平な建築家のことを、「エロ建築家」とよぶことは、まあある。しかし、建築作品のことを「エロ」と評したりはしない。

美術の場合なら、「好色美術」や「エロティック・アート」があると、さきに書いた。しかし、建築の場合はそれもない。「好色建築」や「エロティック・アーキテクチュア」と、われわれは言わないのである。

事態は、建築というジャンルを細分化しても、かわらない。「エ

ロ住宅」、「好色公共建築」といった言いまわしは、どこにもないのである。

まあ、秘宝館めいた神社を「エロ神社」とよぶことはあるだろう。とはいえ、それも建築のせいではない。収蔵品のしからしめるところである。「エロ建築」は、なりたたない。

しかし、それは言葉がないだけなのだろうか。建築というジャンルは、そもそも性的な情感をかきたてる能力に、欠けている。建築を媒体にしたポルノグラフィは、本質的になりたたない。そんな宿命が、建築にはあるのかもしれない。

こう書くと、反論をよせなくなるむきも、あるだろう。毛綱モン太の某作品は、平面形を女陰からとっている。白井晟一の某作は、生殖器を暗示させていないだろうか。磯崎新のモンローカーブは……等々と。

そう、性的な何かを建築表現にいかそうとした事例は、そこそこある。そして、建築になじんだ鑑賞者なら、そこから性的なメッセージをうけとることも、ありうる。主知的には、それを了解すること也不可能ではないだろう。なるほど、この平面は女陰だな、と。

しかし、それで性的な情感をかきたてられたりするだろうか。

たとえば、磯崎新の作品には、しばしばモンローカーブが、あしらわれている。マリリン・モンローの肢体からとった曲線を、建築に導入することがある。建築家としては、キッチュの部分的な混入

というところに、意義を見いだしているのだろう。

しかし、建築に表現されたモンローカーブで欲情する鑑賞者が、はたしているだろうか。ここで、マリリン・モンロー当人へ想いをはせ、性的に興奮する者がいるとは、思えない。

じつさい、建築上のモンローカーブは、モンローの性的魅力を払拭しきっている。というか、むしろ脱Ⅱ性感させるための表現ではないのかと、考えこまされる。

下品な話で恐縮だが、小説や美術、そして映画をあじわって、勃起する男はいよう。股間をぬらす女も、いないとは言えない。しかし、建築ではありえないと思う。建築はポルノたりえないし、いわゆる「ズリねた」になどとうていなりえないのである。

建築は、空間のすがすがしさをつくりだすことができる。けだかい空間の演出も、可能である。空間が入り組んで錯綜した様子、ある種の迷路性をもしたすこともあろう。もちろん、整然ととのつた気配をかもしたすことも、なくはない。

しかし、煽情的な空間演出は、不可能である。少なくとも、文学や美術ほどにむいていないことは、うたがえない。「エロ建築」や「好色建築」という言葉が存在しないのも、おのずとうなづけよう。

とうとうな話の展開だが、音楽にも似たような議論はあてはまる。「エロ音楽」だとか、「好色音楽」といった言いまわしも、まったく流布していない。これも、音楽が本質的に好色性の表現を、苦手と

しているからではなからうか。

むろん、リヒアルト・シュトラウスやシオスタコビッチのように、性愛をそのまま音楽化しようとした例はある。誰そのの演奏に、コケティッシュな展開が聴けたと書くような音楽評もなくはない。しかし、それらが、「ズリねた」になるかと言えば、そんなことはないだろう。

歌手が、声のかすれぐあい、エロティシズムをかなでることはあると思う。テナーサクスのむせぶような音にも、そういう情感は期待しうる。しかし、音楽の構造、リズムとハーモニーそのものが、性感をくすぐることはない。

テナーサクスの音が、聴衆のエロスをかきたてる。それは、建築にあてはめると、壁紙の色艶などがかもしだす効果と、よく似ている。そして、その水準においてなら、建築にも好色性の表現はありうるということか。

パリのサン・ドニ通りは、街娼がたちならぶことで、よく知られている。じつさい、そこへゆけば、ひと目でそれとわかる女たちを見つけることができる。いかにも男たちをそそりそうないでたちが、彼女らのなりわいをしめす記号となっている。

しかし、彼女たちが客と同衾をするだろう建築施設に、これといっ

た特徴はない。パリの市中で見かけるビルと、同じようなつくりになっている。

まあ、ネオンサインが、やや派手目になっていたりする。サン・ドニのセックス・ショップは、一階の外観がそれらしくしつらえられている。しかし、二階からは、通常のビルとなにほどもちがわない。

アムステルダムに、飾り窓とよばれる売春施設がある。そこでは、大きなガラス面をとって、中にいる娼婦たちをクローズアップさせている。もちろん、娼婦たちは、肌を露出させた衣服で、男たちを挑発する。

しかし、飾り窓のあるビルに、それほどきわだった特徴はない。アムステルダムにあるほかのビルと、目だつてちがうところは、見あたらないのである。それこそ、一階の大きな開口部、ガラス面が、建築的な特徴としてはあげられるぐらいか。

娼婦たちの服装には、男をそらせる力がある。しかし、建築にはそういう力がない。建築をいくら色っぽくしたてあげようとしても、おのずと限界がある。建築はポルノたりえない。おそらくは、そんな断念もあつて、建築の表現はおさえられているのだろう。建築なんか、いくらかざつても意味はない。そんなことをするぐらいなら、女をかざりたてろというわけだ。

もちろん、ヨーロッパの古い都市には、建築の意匠統制がある。

彼地では、建築の色や形が、市の建築委員会から統制をうけることになる。

ヨーロッパの古い都市には、だから建築における表現の自由がない。この点は、構造と安全対策さえ万全なら、何をどう表現してもいい日本と、決定的にちがっている。ヨーロッパの建築家たちは、けっこう不自由な状態におかれているのである。

売春地帯のビルが、建築で好色気分を表現しようとしても、だからゆるされないだろう。周囲の一般的なビル群と、様式をととのえるよう、建築委員会は指導するはずである。建築が、煽情的たりえないから表現をひかえているわけではない。それがみとめられないから、こころみないという一面は、まちがいなくある。

ただ、ヨーロッパでも、郊外へゆけば、けっこう派手なギャンブル場はある。おもちゃのようなつくりの遊園地だって、ないわけではない。都市からはなれば、建築委員会の指導から解放されることになる。そして、そういうところでは、建築に射倖心をあおることが、しばしば期待されている。子供のメルヘン気分にくつたえかけることだって、もとめられているのである。

しかし、性欲の喚起をこころがけている建築は、まず見かけない。建築委員会の監視からはなれたところでも、そういうものは存在しないのである。やはり、建築に煽情が期待されていないからではないかと、どうしても思えてくる。

まあ、郊外に発情施設をつくらうとする発想そのものがないためかもしれないが。

さて、日本である。現代日本には、一瞥するだけで、性的な施設だなど判別できる建物がある。ソープランドやラブホテルなどが、それである。

いわゆる風俗営業の店舗にも、そういう建築は、少なくない。一階から最上階まで、その全体が風俗営業であることをうったえかけている建築もある。性的な好奇心を刺激する記号となっている建築が、現代日本には存在しているのである。

もちろん、ラブホテルの建物を見て、性欲が昂進させられるということではあるまい。ホテルのなかでおこなわれるだろうことへ想いをはせて、わくわくするまでのことであろう。建築意匠がもつ効果は、限定的にうけとめる必要がある。

しかし、これらの施設が、建築面でも努力をしていることはいない。その効果には疑問もある。だが、とにかくそそのための役目は、建築にもたくさされているのである。

さきにも述べたとおり、日本にヨーロッパ的な建築委員会はない。だから、その表現は基本的になんでもゆるされる。そのため、全身風俗といった建築も、許容されるにいたったものではあろう。

と同時に、日本ではそその建築をはぐくむ文化的な素地もあるのだと、思えてくる。性感へのうったえかけを、建築はかならずしも

得意としていない。にもかかわらず、そちらの方向の可能性を模索する。そんな文化的伝統が、日本建築史にあったのではないか。

近世遊郭のインテリアでは、しばしば数寄屋のデザインが採用されていた。関連する遊興施設でも、事情はかわらない。京都・島原の角屋には、桂離宮・松琴亭と同じ数寄屋風の市松模様がある。往時の数寄屋風を今日につたえる、代表的な遺構だと言ってよい。

格式ばらなければならぬ建築に、数寄屋の様式はつかわなかった。形式ばったところからはずれた遊びのために、それは愛好されている。はなれの茶室などで、とりいれられたのはそのためである。茶屋、待合をはじめとする遊興空間へ転用されたのも、ゆえなしとしない。

もつとも、それらの遊興施設でも、表から見えるところの表現はおさえられていた。今にのこる角屋も、典型的な京の町屋といった風情を、表へはだしている。数寄屋のつくりでかざられたのは、もっぱら内部空間のほうであった。

それが、二〇世紀以後になって、西洋の意匠を融合しあうようになる。色町では、アール・デコと数寄屋がとけあったりするような事態が、たとえば発生した。それとともに、内部をいрудつていたつくりが外へもあらわれ、全面化するようになっていく。

数寄屋は、さまざまなディテールが、たわむれあうようにつくり

をもつ。統一感を否定する、一種のゆらめきに、通常の格式ばった建築とはちがう魅力がある。遊興施設で好まれたのも、そのせいではあつたろう。数寄屋のかもしだす浮遊感が、これからは遊ぶ空間にはいるんだとする想いを、煽つたのだと思う。

そして、そういう建築物が、近代以後、遊興空間では全面化されていく。もちろん、アール・デコとの合体などによつて、和風の要素はおさえられた。しかし、新しく導入された西洋の様式も、数寄屋風によつて再編成されることとなる。

ラブホテルやソープランドの意匠も、それが大衆化されたところで成立した造形にはかならない。近世の遊興的な数寄屋が、現代的に変形をとげた姿なのだと考える。

建築に、性欲をそその力が本質的にあるとは、思えない。しかし、近世の日本では、その方向へむかった建築が出現した。色町ではぐくまれた数寄屋がそれである。

かつて、哲学者の九鬼周造は、建築のもつ媚態を論じたことがある『『いき』の構造』。西洋のアーキテクチュアでは見いだしにくい要素を、日本建築から抽出した。こういう指摘が可能になるのも、数寄屋の背景があるからだろう。

建築にあえて媚態の演出を期待する。私はここに、近世以後の日本建築史がもつ、特徴のひとつを読む。ヨーロッパにはあまり顕著でない、そして世界史的にもきわだつ個性があると思う。

さんねんながら、今、その全体史をおいかける準備はない。心おぼえのラフスケッチをしたためたまでである。